

私の保育

私はこの四月に、保育者としての第一歩を踏み出した。入園式前、これからの保育のために、保育室の諸々の準備が行なわれた。その準備でさえ、ロッカーはどのように並べるか、おままごとはどこに置こうか、絵本は何をどこに出そうか、と一つ一つの事に戸惑う私だった。先輩の先生方に助けていただきながら、一応保育室が、形として整った。「明日から、子どもたちとの生活がここで始まる……」期待と、より大きな不安とを胸に、入園式を迎えようとしていた。

入園式の日、父母に付き添われて、初めて保育室へ入って来た子どもたち一人一人を、「○○ちゃん、おはようございます」と、私は精一杯の気持ちで迎えた。この一瞬の子どもたちの目ほど、印象的なものはない。じっと見つめる目、不安そうに見上げる目、にっこりした目、キョロキョロ探っている目、私

を決して見ようとしぬ目……、子どもたちの一瞬の表情に、緊張した私の心は、大きく揺れた。三月に一度、おひな祭りに招待されてこの子どもたちと会ってはいたけれど、入園式の日「○○ちゃん、おはようございます」の瞬間に、この子どもたちと、出会ったと感じた。

あくる日は、年長組の子どもたちも登園し、入園式のなんとなくぎこちない雰囲気とは異なって、生き生きとした子どもたちの声や動きで、幼稚園は活気に満ちてきた。私は、四歳児二十六名を、フリーの先生に手伝っていたきながら、担任する事になっていった。失敗だらけで、悪戦苦闘の毎日が過ぎていった。そして、保育の現場では、実にさまざまなのが、次から次へと起こった。それらが、たとえささいな事でも、時として非常に重みのある事として、保育者である私に、はね返って来る事

桑 田 幸 子



があつた。そこで、保育者ならば、誰もが経験し、感じる事だとは思うが、子どもと触れ合う中で、いろいろと感じた事を、断片的になるが、つづつていきたいと思う。

入園もないころ、登園してきた子どもたちはそれぞれに異なつた表情をし、異なつた行動を示していた。このころは、『シールをはる』『スモックに着替える』『うがいをする』これだけの事も、なかなか大変であつた。子どもたちの登園時刻には、三十分ほどの幅があり、次から次へと登園する一人一人に、これらの事を促すのだが、最後の一人が終わるまで、相当、時間もかかつていた。新米の私は、保育室の中を行つたり来たりしながら、これらの事にあたるのが、やつとだつた。保育時間も、まだ午前中とあつて、朝と帰りの支度で、一日が過ぎてしまうようでもあつた。子どもたちの中には玩具で遊んだり、庭を元気にはねまわる子どももいたが、部屋の中で、じつと一日中立つている者もいたし、私の体のまわりには、常に数人の子どもたちが、磁石のように付いてまわつた。私が、スモックの着替え等で、室内を動きまわつていたある時、朝の仕度の終わつた一人の女兒が、「何したらいいの?……何していいのかわかんない」と、真剣なまなざしで、問いかけてきた。私は思わず、はつとした。無理もない。この女兒だけではない。おそらく、他の子どもたちも、告げることもできないで、このような気持

ちを胸にかかえこんでいたにちがいない。『保育者が、いっしょになつて遊ばなくては』『保育者が遊ばなくては』頭の中でわかつていたはずなのに、実際には、何もできていなかったのであつた。

私は、例のごとく私の体についてまわる子どもたちもいっしょに「お庭に行つてみましょう」と、手に手をとつて、庭に出た。庭にはたんぼぼが、あちこちで咲いていて、何人かの子どもたちが、花を摘んでいた。私たちもその中に入り、花を摘むことにした。子どもたちは、急に生き生きとした表情を見せ、花摘みに夢中になりだした。「ここにも咲いていたよ」「ほら、こんなに長い」「私はこの草を摘むの」「たいへん、あつちにも咲いている」と、言葉が自然に、とび出てきた。

何日かが過ぎ、子どもたちも私も、次第に緊張がときほぐれてきた。多くの子どもたちは、庭へ出て遊ぶのが、気に入りのようだった。すべり台やグロブジャングル等の遊具を使った、砂場に穴を掘つたり、友だちとのつながりも、少しずつではあるが、できてきた。なかでも、草花を摘む事は、子どもたちの気に入りだつた。入園当初は、泣きながら部屋に入り、話しかけても、一言も発せず、立つたままで、緊張と不安のかたまりみたいな男児も、「たんぼぼが咲いていたよ」と、小さな声で、小さな花を私に見せたりもした。草や花はすぐに、子ど

もたちと友だちになれるようで、遊べないで困っていた新米の保育者としては、少し、救われた気もした。入園当初の訳のわからない状態から、少し落ち着きもと戻してきたある日、降園後、保育室の掃除をしていると、子どもたちに摘みとられた草やたんぼの花が、半ばしおれて、床に散ったり、ロッカーの上のところがったりしていた。子どもたちは、摘むことだけにどまってしまうていた。しおれた草花を見つめながら、自分の足りなさを、責めるしかなかった。それから、『摘んだ草花をどうしようか』『大切にしよう』等、考えながら行なった。うさぎに食べさせたり、あきびんを花瓶にして飾ったり、ままごとの材料にしたり、花束を作ってプレゼントにしたり、スモックのボタン穴にさして、花のボタンを作ったり……。保育者は、子どもが遊んでいるのを、ボンヤリ見過ごしてはいけないという事を、花摘みという一つの事を通して、つくづく感じさせられた。

四月の父母会で「おもしろししたけれど、まだ先生に言えないらしくて……」と、ある母親から言われた。それは、その子どもと私とが、まだ心のつながりを持って、子どもの心が開いていなかったという事でもあるが、私が、おもしろしに気づかなかったという事でもあった。その子どもが、どのような気持ちでいたかと思うと、とてもすまない気がした。このように、『気

づかない』『目が行き届かない』といった事は、多くあった。ある日、砂場のどろんこ遊びから、保育室へ行こうとした時、部屋の入口で、男児たちが、取っ組み合いのけんかを始めた。

一人の男児が数人の子どもたちに、責められているようだった。突然、その男児が、思い余ったように、猛烈にとびかかったのだ。激しく組み合うのに、私があわててとんで行くと、その男児は、せき込むように泣きだした。とてもくやしそうな、とても悲しそうな泣き方だった。事の起りは、彼が、床にクレヨンで描いたという事だった。だから、まわりの子どもたちが、彼を責めたのも、無理のない事なのだが、あまり激しく責められて、どうしようもなくなったようだった。彼は、クレヨンを床に描いた以上の責めを、受けてしまっていた。

『私が、もっと早く気づいていれば、男児は、これほどまで傷つかなかったのに……』と、すまない気持ちで一杯になった。ふと見ると、少し離れた所で、数人の子どもたちが、一生懸命ぬれ雑巾で床をみがいていた。それは、半ば、面白がってはいたが、クレヨンを消しているのだった。思いがけない事から、子どもたちがつながっていた。そして、このクレヨン騒動はいろいろな事を、私に知らせてくれたのだった。自分の目が行き届かなかった事は、言うまでもないが、「困ったことがあったら、いつでも呼んでね」と、言ってはいても、子どもたちにと

って、まだまだ私は、信頼される先生ではなかったのであり、子どもの心がまだ開いていなかったという事でもあった。

五月の下旬、折からの風邪気味のせいもあって、私は声が、全く出なくなっていました。耳もとでささやく程度は、どうにかできて、子どもたちが、声をあげて遊んでいる中では、そんなか細い声は、かき消されてしまうのだった。言うまでもなく、声が出ないのは、大変不便であり、いぎ、話せなくなってみて、保育中にずいぶん、あれこれとしゃべっている事が、あらためて感じられた。新米の保育者ゆえに、のどが鍛えられていない事もあるかもしれないが、子どもたちに大声でどなっていた事も、一つの原因であろうと思った。お弁当や帰りのお集りで、皆がなかなかそろわなかったり、静かにならなかつたりした時、おかたづけをしない時、つい大声をあげていたのだった。

今度は声が出ないのだから、大声をあげたくてもあげられなくなつた私は、ある時、砂場で数人の子どもたちが、遊んでいるのに、そとと入って遊んだ。そして、砂でおだんごを、いくつも作った。いつの間にか、「先生の大きいね」「ぼくのも大きいよ」「私は固いおだんご、作ってるの」「ぶつけてみようか」と、競争みたいに、大きいや、固いや、黒いや、白いや、いろんなおだんご作りになっていった。私は黙ったま

まだだったけれど、一生懸命泥をこね、砂をかき集めて遊んだ。それは、とてもものんびりした、なごやかなひとときだった。保育の場で、何か形として集団がまとまる事ばかりに気をとられ、大声をあげたり、あちこちとせわしなくただ動きまわっていて、子どもと共に、自分も夢中になって遊ぶ事を忘れていたのではないか、この砂場でのひとときは、そんな事を感じさせてくれた。保育者としての自覚や構えは、必要ではあるが、保育者は、集団のまとめ役ではないであろう。そして、保育者が子どもと共に触れ合い、遊び、出会った所から、保育は始まっていくのだと思った。

こうして、保育者としては失敗だらけのうちにも、子どもたちは次第にうちとけ、遊べるようになってきた。望遠鏡やカメラ作り、おばけごっこ、おいかげっこ、くすりやさんごっこ、さかなつり、ブランコやすべり台の遊具で遊んだり、クローバーの首飾りを作ったり……保育室や園庭のあちらこちらで、それぞれに楽しそうだった。子どもたちのつながりも、次第に出てきた。お弁当を、ボロボロこぼしながら食べている男児に、「こぼすのの名人だ」と言いながらもいっしょに遊ぶために四〜五人の男児たちは、食べ終わるのを待っていたり、欠席の子どもがいると「○○ちゃん、どうしたの?」「きょうはきてる?」と、登園するなり聞いたりもした。

六月に入ったある雨の日、降園前に、皆でいす取りを行なった。最初は人数だけのいすを用意して、全員がすわれるようにした。次に、少しずついすを減らしていくと、子どもたちも興にのって来た。途中で、BCGのために保健室へ行っていた数人の子どもたちが、部屋へ戻ってくると、「おしえてあげるから」と、他の子どもたちは誘い、あとから来た者も、自然にとけこんだ。いすの数が少なくなってくると、残っている子どもはもちろん、まわりの子どもたちも、懸命になって応援した。その応援に答えて、手を振りながらいすをまわる子ども、体中で声援を感じながら、いすから目を離さないうで用心深くまわる子ども——室内が、子どもたちの歓声と熱気でふくれ上がった。

よりよい保育をめざすならば、結局、保育者の保育観や児童観が、そのより所となるであろう。ところで、入園当初「席が決まっていけないので、どの席にすわればいいのか迷っている」とか「前の幼稚園では、朝行くと、『きょうは〇〇しましょう』と、その日の活動が決まっていたけれど、今度はそれがいないので困っているらしい」と、母親から聞かされた子どもがいた。絵の具を用意したりすると、とてものってきて描くのだが、活動を特に用意していない日は、朝からぶらぶらし続けているようだった。私の導き方も至らないのだが、その差が、非常に目

立っていた。お弁当やおあつまりの知らせには敏感で、保育者の言う事には素直に従うのだが、自らぶつかり、試し、考えてみるという事が、とても欠けているように感ぜられた。私の保育は、まだ始まったばかりだけれど、この子どもを含めて皆が、意欲を持ち、ぶつかり、生き生きとしながら伸びて行く事を、願っている。そして、保育のさまざまな活動も、保育者の「一人一人に対する願い」に支えられるのであり、願い無くして、意図はあり得ないと思う。

一学期はあっというまに過ぎ、今はもう夏休み……。なかだかこの三ヵ月を、かけ足で通り過ぎたようで、あちこちで大切なものを見過ごしたように感じる。日々の保育に追われていると、ふり返って考え直す事がなかなかむずかしいが、ここまでするのには、私としては、反省や発見等、新たに学ぶ事ができた。頭の中で、あれこれと思っても、実際に保育の中で展開するのはむずかしい。が、これからは、もっと動ける自分になりたいと思う。あせらず、一步一步大地を踏みしめるように、よりよいものをめざして行きたい。

(学習院幼稚園)